

接頭辞 RE の本質的機能 — RE と à nouveau の比較対照 —

佐々木 香理（関西学院大学非常勤講師）

従来、接頭辞 RE (re, r, ré をまとめて RE と表記する) の本質的機能は「反復 (itération)」を表すことであるとされる。しかし、我々はこれまでの研究の中で、発話者が (1) のような発話操作を経る際に RE を付加することを主張し、反復はこの発話操作を行う際に生じる価値の 1 つであることを指摘した。

- (1) a. 発話者は事行の参加者のあり方についてあらかじめ何らかの評価をしている。生起前のあり方を「仮のあり方」として、生起後のあり方を「元の・本来のあり方」や「(目標・現実に照らして) 妥当なあり方」として評価している。
- b. 事行の生起後のあり方に視点を置き、「仮のあり方」から「元の・本来のあり方」や「妥当なあり方」に移行することを表す際に RE を動詞に付加する。

本発表では、(1) の妥当性を検証するために、RE を反復を表す à nouveau と比較対照し、両者の差異を明らかにする。そのために、まず、使用実態の観察から à nouveau がどのような動詞と共起するかを示す。次に、à nouveau と共起可能で RE の付加が可能な使用頻度の高い動詞 lire, travailler, voir, se tourner, dire を分析し、両者の使用条件を明らかにする。

本研究では、動詞および動詞の表す事行を P とし、最初に生起する P を P1, 繰り返される P を P2 と呼ぶ。そして、RE と à nouveau の使い分けについて次のことを主張する。

- (2) P1 と P2 のあいだで、P の参加者に関する質の変化を問題にする場合は RE を用いる。質の変化とは、P の生起により参加者のあり方が「仮のあり方」から「元の・本来のあり方」や「妥当なあり方」に移行することである。一方、質の変化を問題にできない場合や問題にすることが難しい場合、あるいは、問題にしない場合は à nouveau を用いる。